

生で聴くルネサンスの合唱曲④

～宗教改革期に輝く双星

ダウランドとパレストリーナ～



パレストリーナの肖像

※ダウランドの肖像画は残っていません。

監修：中井英文（西宮東高等学校教諭）

リュート演奏：小出智子

ヴィオラ・ダ・ガンバ演奏：野田祐子

ミサ曲指揮：中安公則

合唱・独唱 Chorus Jovis

ソプラノ：泉由香 岩崎光 上木裕子

アルト：西野夏子 薬谷佳苗

テノール：中井英文 中安公則

バス：清水英幸 中原浩二

○肖像画が残っていないダウランドと、
肖像画が残っているパレストリーナ
→二人の社会的地位を象徴？

晩年になってやっとイギリス王室作曲家の地位を手に入れたダウランド。その音楽は恋の歌などの、世俗曲（宗教曲ではない音楽）がほとんど。

対して、パレストリーナは若い頃からローマ・カトリックの教皇庁のために数多くの宗教曲を量産した。

パレストリーナは「音楽の成功者」で、ダウランドは「音楽では大成しなかった人」？

ジョン・ダウランド（1563年頃ー1626年2月20日）

※来年2月が没後400年

☆シェークスピアやエリザベス1世の時代の作曲家・リュート奏者

☆「リュート伴奏付きの歌曲・合唱曲」そして「リュート独奏曲」の分野で、高い芸術性を持つ音楽を生み出した。

☆メランコリー（憂鬱）の情緒にあふれた歌曲『流れよ、我が涙よ』がヨーロッパで大ヒット。数多くの模倣作を産み出す。



それまで西洋社会において価値があまり認められていなかった「メランコリー」の価値の認知を一般の人にも広めた。

☆そもそも、メランコリー（憂鬱）とは？

メランコリーmelancolyとは語源的に「黒い胆汁」のこと。
（参照）

melas「黒い」→melanin「メラニン（日焼けの色素）」



では、「黒い胆汁」とは何か？

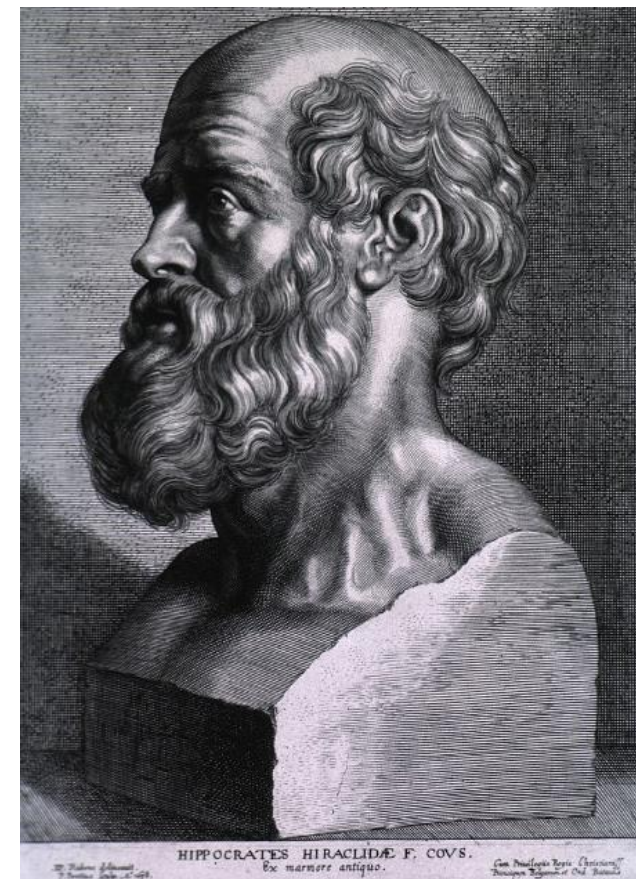
西洋で古くから信じられてきた「四体液説humorism」。

「人間の身体には数種類の体液humorがあり、そのバランスが崩れると病気になる」、と信じられていた。

その体液のひとつが、黒い胆汁＝憂鬱なのである。

☆ヒッポクラテース、ガレノスの 四体液説

- 病気とは自然に発生するもので、超自然的な力や神々の仕業ではないと考えた最初の人物→ヒッポクラテースは「**医学の父**」と呼ばれる。**四体液説**を提唱。
- ガレノス（129年頃 - 199年）はヒッポクラテース医学を基本に人間には「**血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁**」の4つの体液があり、そのバランスが崩れると病気になるとする**四体液説**を継承し発展させた。

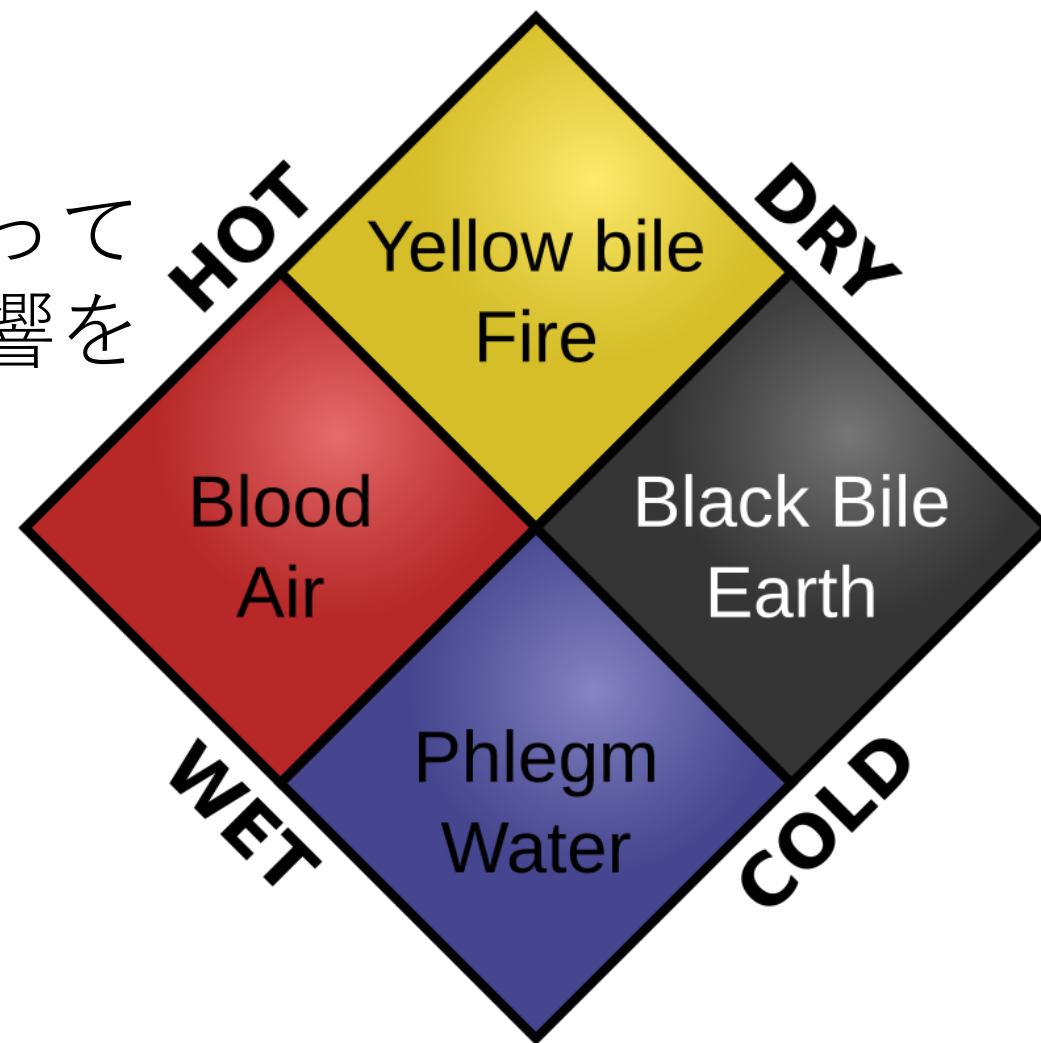


「医学の父」
ヒッポクラテース
(紀元前460頃－
紀元前370頃)

☆四体液説とメランコリー

○世界が「空気」「火」「水」「土」の4つの元素から成り立っているとする「四元素説」から影響を受けている。

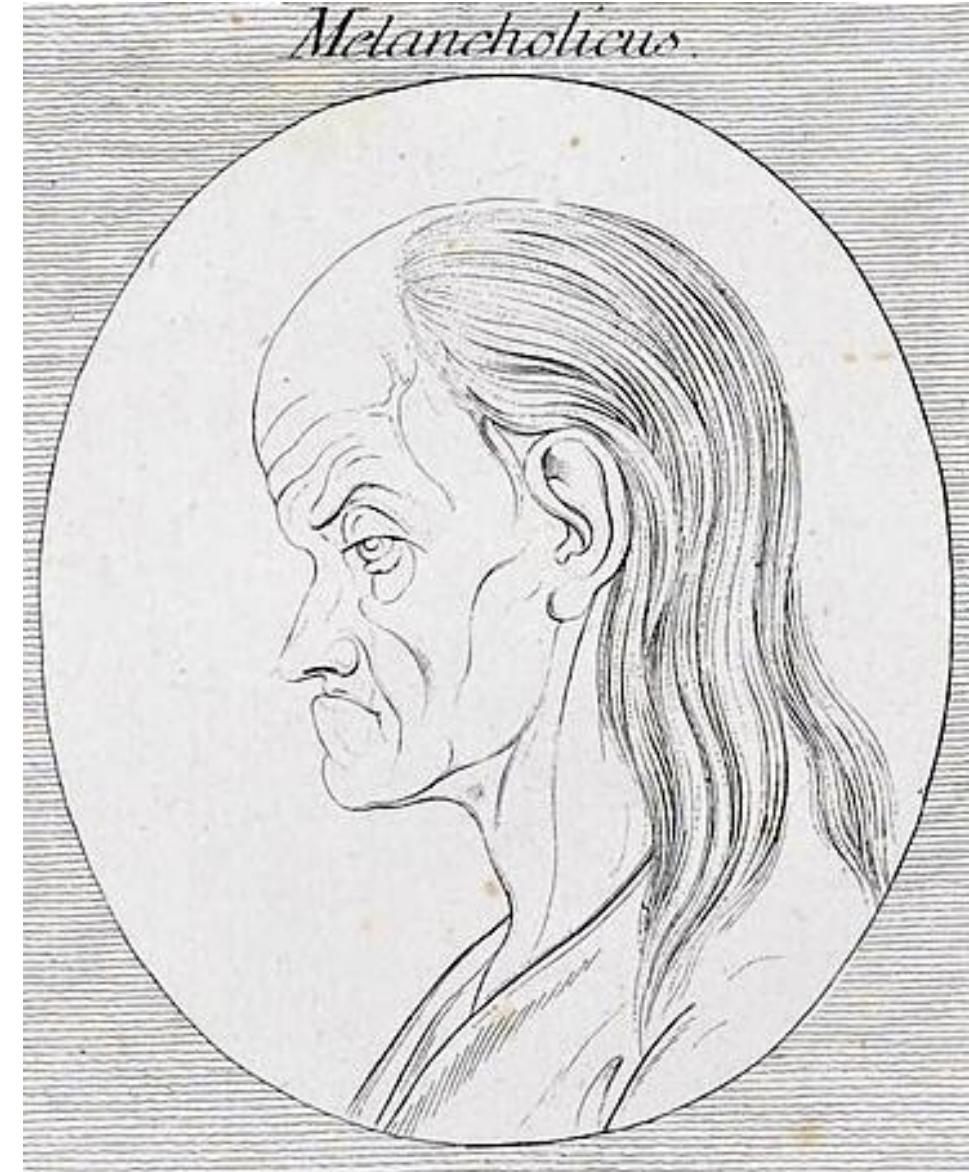
○空気ー血液ー春ー多血質
火ー黄胆汁ー夏ー黄胆汁質
水ー粘液ー秋ー粘液質
土ー黒胆汁ー冬ー黒胆汁質



○黒胆汁質は寡黙で頑固、ひとりで思索に耽ってばかりいる、とされた。

○うつ病は脾臓から分泌される黒胆汁の過剰または不自然な量に起因すると考えられていた。

中世までは、おおむね、黒胆汁（メランコリー）は悪いイメージでとらえられていた。



18世紀の木版画に描かれたメランコリー

○ガレノスの四体液説は、11世紀から16世紀の西洋の医学に権威として君臨した。

○しかし15世紀に、新プラトン主義者で人文主義者の マルシリオ・フィチーノがメランコリーを悪徳のしるしから天才の証へと見直した。

「心は土の中心に向かうように思索に向かう」



ルネサンスの芸術に大きな影響



デューラー「メレンコリアⅠ」(1514)

エリザベス女王への「おべっか」の歌が多いダウランド？

「でも、お前の毒矢をもってしても、
恋の幻惑を見させることができないの
か、女王の穢れなき心に触れることも、
近づくことさえもできないと？」

「女王は私の恋の弓のまとはならない。
恋の誘惑に対して、彼女の目は命
じ、心は『否（いな）』と言うだ。」

(⑤教えてくれ、キューピッドよ)



‘Virgin Queen’エリザベスの「処女」
を賛美



⑧時の神は静止して

時の神は静止して、彼女の顔に見とれる。
そうだ、時間よ止まれ。どうせ何分でも、何時間でも、何年でも、時は彼女に場所を譲ることになるからだ。
ほかの全てのことは変わりゆくものだが、彼女は美しいままの姿だ、
おそらく天の星々がその軌道を変えるまで、時間というものがその名を失って消滅するまでそのままだろう。



エリザベスの美しさを賛美

ダウランドの人生の数々の謎？

< 謎 1 > なぜダウランドは、エリザベス女王への「おべっか」の歌を量産したか？

→王室の専属音楽家として採用して欲しかった？
(おべっかの歌は、一種の就職活動か？)

< 謎 2 > 「おべっか」にも関わらず、ダウランドがなかなか王室に音楽家として採用されなかった理由は？
(ダウランドが王室音楽家に採用されたのは1612年、49歳の頃。)

< 謎3 > 1595年、ダウランドは旅先のフィレンツェで「エリザベス女王殺害計画」に、あわや加担する羽目に陥りそうになった。女王のカトリック迫害から亡命してきたカトリック教徒たちが、ダウランドに近づいてきたのである。身の危険を感じたダウランドはフィレンツェを離れ、女王の重臣のロバート・セシルに身の潔白を訴える長文の手紙を書き、事なきを得た。

なぜ王室音楽家ではないダウランドが、そのような女王殺害を画策する団体に目を付けられたのか？

< 謎4 > ダウランドは1598～1606年の期間、デンマーク王クリスチャン4世から誘いを受けて、王室リュート奏者に就任していた。

生まれて初めて重要な地位に就いたダウランドだが、当時の音楽家としては異例な高給（「天文学的」と評する人もいる）をダウランドはもらっていた。一体、なぜか？



クリスチャン4世

< 謎5 > ダウランドは前述のように、1612年にイングランドの王室音楽家になったが、それ以降、彼はほとんど作曲をしなくなった。

せっかく待望の（？）ポストに就けたのに、なぜ作曲の意欲を失ってしまったのか？

果たして、これらの「謎」を統一的に説明できる事実は存在するのか？

「ダウランドは二重スパイだった」説

スパイであったダウランドを主人公にした演劇『I, Spie -Richmond』が2024年6月、イギリスで上演された。

日本ではあまり浸透していないが、「ダウランドはスパイ」説は英国では多くの音楽学者や演奏家に支持されている。

エリザベスは宗教改革の時期にカトリックを迫害したため、**国内外に多くの敵を作った。**

その諜報活動のため、ダウランドがスパイとして活躍した？

< 謎4 > について言えば、ダウランドがデンマーク王室からスパイとして報酬を受けていた、と考えると音楽家としては破格の報酬も説明が付く。

< 謎1 > のエリザベスへの「おべっか」の歌であるが、例えば「⑤教えてくれ、キューピッドよ」も「⑧時の神は静止して」も、ともに1603年に発表された歌である。この時期はダウランドがデンマーク王室に仕えており、また英国との間もダウランドは行き来していた時期でもある。もし彼がデンマークのスパイであったなら、英国王室から怪しまれないように、祖国に忠誠心を見せる必要があったからではないか？

しかし、ダウランドは本当にデンマーク王に忠誠心を抱いていたのか？

コペンハーゲン王立図書館に、英国駐在大使のステイーヴン・レシューからダウランドに協力を要請した手紙がある。レシューは、イギリスとデンマーク間の海運紛争の改善に努めていた。明らかに「英国側」の人間から頼られているのは、ほかならぬダウランド自身が「英国側」の人間であり、デンマーク王室の情報を英国に届けるスパイであった可能性が十分にある。もしそうならば、**ダウランドは英国に忠誠心を抱いた英国とデンマーク間の二重スパイ**、ということになろう。

二重スパイ・・・ある勢力が送り込んだスパイが、同時に相手側のスパイでもある人物のこと。

仮にダウランドが英国に忠誠心を持つ英国とデンマーク間の二重スパイだったならば、

< 謎 2 > の、ダウランドが英国王室の専属音楽家になかなか
かなれなかったのは、スパイ任務のためと考えられるし、

< 謎5 > の、ダウランドがせっかく王室音楽家になれても
作曲しなかったのは、言わば「スパイ活動の功労者」と
して名譽職的に王室音楽家になっただけで、さほど音楽家
としての働きが期待されてなかったためであろう。

< 謎 3 > ダウランドがデンマーク王室の音楽家になる前から、英国王室のスパイ活動を行っていたと仮定する。

ロバート・セシルへのダウランドからの報告としては、「自分がエリザベス女王殺害計画に巻き込まれそうになった」という内容であるが、万が一、その手紙が敵に読まれてしまった時のことを考えて自分がスパイであることを隠してセシルへの報告文を書いたのではないか？つまり、実際には「ダウランド自身がエリザベス殺害計画を見出し、未然に防いだ」可能性があるのではなかろうか。



ロバート・セシル

ジョヴァンニ・ピエルルイージ・ダ・パレストリーナ

1525年2月3日から1526年2月2日の間に生誕する
– 1594年2月2日没 ※今が生誕500年の期間

ローマ教皇のお膝元の作曲家として長く活動し、100曲以上のミサ曲、300曲以上のモテット（宗教曲の一種）など多くの教会の典礼のための音楽を作った。まさにローマ教会こそが、パレストリーナのパトロン（庇護者）であったと言える。

そのため、世俗的な歌詞のマドリガーレ集は2冊しか出版されていない。ただし当時のローマの教会関係者らが好んだ宗教的な歌詞のマドリガルも2冊作っている。



楽器紹介①「リュート」

弦を指ではじく「撥弦楽器」だが、ギターとは違って背面が半球形のような形状である。
(ギターは横から見ると多角形のような形状)

中近東の「ウード」や日本・中国の「琵琶」と近縁の楽器。

ルネサンス時代に栄えたが、音量が小さいことなどから19世紀から使用されなくなる。しかし、20世紀に復興する。



1世紀ごろのリュート
(アフガニスタン)



13世紀の楽器「ウード」



日本の琵琶

楽器紹介②「ヴィオラ・ダ・ガンバ」

「脚のヴィオラ」という名の通り、楽器を脚で支える。（高音の小さい楽器も同様。）これに対してヴァイオリン族（ヴィオラ、チェロ・・・）はバロック時代にはヴィオラ・ダ・ブラッチョ（「腕のヴィオラ」）と呼ばれていた。

また弓も、ヴァイオリン族と違って日本の「お箸」を持つような握り方をする。

ヴィオラ・ダ・ガンバの起源は**15世紀**、ギターによく似た撥弦楽器の「ビウエラ」を弓で弾き始めたのが端緒とされる。

日本へは天正遣欧使節によって**16世紀**に伝えられ、信長や秀吉もヴィオラ・ダ・ガンバの演奏を聴いた記録がある。



先祖の楽器とも言われる
ビウエラ

「太陽をまとい、星々の冠をかぶった美しい聖母よ、あなたは最も高きところの太陽（神）を喜ばせ、あなたの中に光（イエス）を潜ませた。」“Vergine bella”より

詩人ペトラルカが「ラウラ」という謎の女性に対して、美と美徳の権化として精神的な愛を捧げる歌を多く作った歌集からの1曲。

ラウラに魂を強く惹きつけられたペトラルカは、しかし同時に生身の女性という「地上の美」への愛にキリスト教徒として罪悪感を覚える。歌集の最後に「天上の美」たる聖母マリアへの賛美の歌をペトラルカは詠み、罪の赦しを乞う。

→世俗曲（イタリア語）でありながら宗教的な内容が、宗教改革の時代の緊縮的な空気感の中でも教会関係者に受けが良かった？

ペトラルカにとって永遠の女性「ラウラ」のモデルは存在するのか？

①「ラウラのモデルはローラ・ドゥ・ノヴェス（1310年頃 - 1348年）」説

彼女はユーグ・ド・サド伯爵（マルキ・ドゥ・サドの先祖）の妻であった。



ローラ・ドゥ・ノヴェス

②「ラウラは完全に架空の人物」説

ラウラへの愛は、「高貴な女性への献身的な愛」という中世の吟遊詩人の宮廷恋愛の継承である。また、**Laura**は「月桂樹」**Laurus**から作られた名前前で、月桂は詩人の名誉・名声の象徴であることから。



桂冠詩人

対抗宗教改革と音楽

○1517年のルターによる宗教改革に、カトリックの側から対抗策として打ち出してきた内部改革。

特に、1545年3月15日にトリエントで召集され、1563年12月4日に終了したトリエント公会議は、その後のカトリックや音楽の方向性を決定づけた。



トリエント公会議

トリエント公会議で音楽に起きた変化

- ①教会音楽は、厳粛なスタイルで書かれるべきで、恋愛の歌などを元に教会音楽を書くことは差し控えること。
- ②多声音楽（ポリフォニー、同時に複数のメロディーが鳴り響く音楽）は、あくまで言葉が明瞭に聴きとれなければならない。

①従来の作曲家は、恋愛の歌などの世俗曲のメロディーを元にミサ曲を書いていたが、パレストリーナは聖母を讃える聖歌などを元にミサ曲を作るようにした。

②多声音楽でも歌詞が聴き取れ、神の言葉が人々の心に届くような工夫が必要となった。



<ア>複数の声部がからみ合う場面でも、言葉が聴き取れるように音楽を整理した。過度な装飾や複雑すぎるリズムを回避。

<イ>親しみやすいメロディー、不協和音の少ない美しい和音を多用し、自然で耳に親しみやすい音楽づくりを目指した。
(後のモンテヴェルディが不協和音を多用した刺激的な音楽だったのと、好対照。)

☆作曲家フックスによる
「パレストリーナ様式」の特徴☆

<1>音楽は動的で、常に流れている。

<2>メロディーは隣の音に進む（順次進行と呼ぶ）のが基本で、音符間の跳躍がほとんどあってはならない。 ※歌うような旋律

<3>メロディーに跳躍が起きると、それ埋めるべく、反対方向への段階的な動きによってすぐに対抗される。 ※波打つような旋律

<4>不協和音は経過音や掛留（けいりゅう）音、弱拍にのみ使われる。
※耳に心地よく、刺激の少ない音楽



ヨハン・ヨーゼフ・フックス

経過音（けいかおん）

和音の構成音から階段上に同じ方向の次の音に進み、不協和音を作り、さらに同じ方向に進んで再び和音の構成音になる音

掛留音（けいりゅうおん）

直前の和音の音が次の和音まで伸ばされた結果、不協和になる音

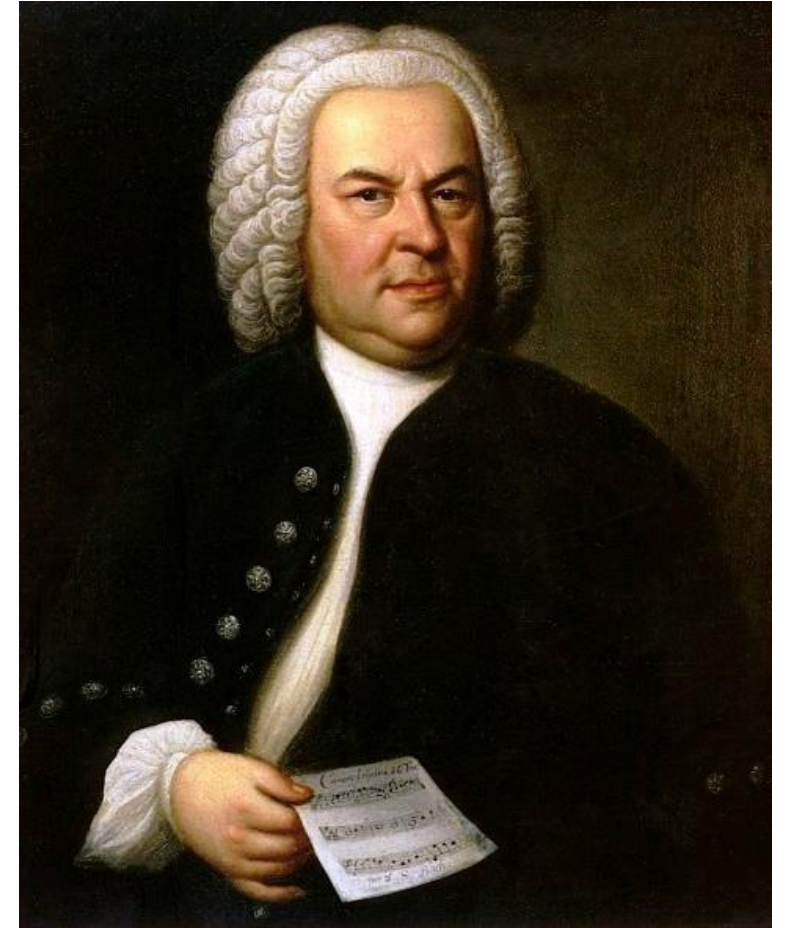
弱拍・・・音楽で、強勢(アクセント)の付かない部分。
4拍子の2・4拍目、2拍子の2拍目など。

※弱拍に不協和音を置くと、「隠し味」的な音作りになる。

☆パレストリーナの影響☆

パレストリーナの編み出した順次進行を主体とした簡素・平穏・緻密な教会音楽の様式は、教会音楽の模範としてローマ楽派の作曲家たちに影響を与えた。

また前述のフックスの著書『Gradus ad Parnassum』（1725）によりパレストリーナ様式は対位法音楽のモデルとして扱われた。この本は今日でも、音楽理論と作曲の指導に使用されている。



ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

かのバッハもパレストリーナの作品、特に「ミサ・シネ・ノミネ」をよく研究し、みずから編曲もしたほどであり、自身の「ミサ曲口短調」にもパレストリーナの影響が見られる。

☆ミサ曲とは☆

カトリック教会で最も重要な典礼儀式が「ミサ」で、ミサのために書かれたオリジナルの教会音楽を「ミサ曲」と言う。

ミサの典礼文は「通常文」を基本としているので、作曲者や作曲された時代背景が異なっても、歌詞そのものは一定である。

ミサ通常文は、5つの部分から成っている。
〈キリエ〉、〈グローリア〉、〈クレド〉、
〈サンクトゥス〉、〈アニュス・デイ〉。

ルネサンス時代には演奏会はなかったので、あくまで典礼の中で演奏されたが、ベートーヴェン以降は上記の5曲のみをホールなどで演奏することが多い。



15世紀のミサの様子